

ニューカマーの子どもに対する教育支援の体系化に向けた基礎的研究—1.5世と2世の差異に注目して

三浦綾希子（一橋大学大学院社会学研究科 博士課程）

■ 研究の背景・目的

1990年の出入国管理及び難民認定法の改訂から注目されるようになったニューカマーの教育問題だが、近年ではその多様化が指摘される。そのうちのひとつとして挙げられるのが、世代の進行による変化である。今後、ニューカマーの世代はますます進行し、その教育問題も多様化していくことが予想されるが、こうした変化を捉えるためには、世代によるニーズの差異を明確化させておく必要がある。本研究では、ニューカマーの子どもたちを学齢期の途中に来日した1.5世と日本生まれ日本育ちの2世に分け、それぞれの子ども特有の問題とは何なのかを浮かび上がらせる。その際に、子どもの育ちに主に関わってくる学校、家庭、地域という三領域を複合的に捉えながら調査を進める。学校教育外教育にも目を向けることで、国の施策の影響を免れない学校教育に対し、新たな教育の場の可能性を提示することにもなる。

■ 研究の方法

ニューカマーの子どもたちを学齢期の途中に来日した1.5世と日本生まれ日本育ち、もしくは学齢期以前に来日した2世に分け、参与観察とインタビュー調査を行った。対象地域は、様々なエスニックグループが混在している都市部のA地区と、日系南米人が集住している地方都市B地区である。また、ニューカマー特有の問題を浮かび上がらせるため、在日朝鮮人の多いC地区での調査も補足的に行った。

■ 成果

(1) 1.5世の抱える問題

- ・日本語習得の問題：日本語が話せないということは、状況によって、プラスにもマイナスにも働く。言葉が分からないことによって、支援の対象となり、良好な人間関係を形成する場合と日本語が話せないことによって、排除、差別される場合がある。それを左右するのは、教師の認識によるところが大きい。だが、いずれの場合も言語によって日本人との間に圧倒的な権力関係が存在していることは確かであり、子ども達の劣等感を醸成する経験ともなっていた。
- ・学校適応の問題：日本語ができないことによる劣等感が、学校適応にも影響を及ぼす。日本語に自信がないが故に、日本人と友人関係を築くのに躊躇する子どもも多く、ニューカマー同士で集まれる場を居心地のよいものと感じている子どもが多かった。

(2) 2世の抱える問題

- ・アイデンティティの問題：親の出身国での生活経験がない2世は自分自身のルーツを確認する場がないことが多い。親から言語や文化が継承されることはほとんどなく、学校外の教会や公園で同じ背景を持つ1.5世と関わることによって、自分のルーツを確認する子どもが多く見られた。
- ・母語維持の問題：第一言語が日本語になってしまう子が多いため、親とのコミュニケーションが難しくなる。中には、日本語ができない親を馬鹿にする子どももでてくる。だが、日本の学校だけで生活している場合、親の母語を習得することはなかなか難しいため、外国人学校や学校外教育の場で言語を習得している子どもが多かった。

■ 今後の支援

子ども達は親の生活戦略に応じて、移動することになるが、その都度その都度、与えられた状況に適応しようとしている。このような子どもに対し、学校は日本語指導や適応指導を行うが、教師や学校によってその支援の有り様は様々であり、子どもによって学校経験には差がある。だが、多くの子ども達は、学校だけでは日本社会で生き抜くための資源を調達できず、学校外の場で資源を調達していた。地域の学習室や教会など学校外教育の場は、学力補償の場、進学のための情報提供の場、ニューカマーの子ども同士がつながる場、子ども達のエスニシティを肯定する場としての機能を持つが、総じて学校で得られない資源を獲得する場として位置付く。特に重要なのが、ルーツを確認するための場としての機能である。日本の公立学校に於ける教育は、日本国民を形成することを目的としているため、エスニックなルーツを確認する機能など付与されていない。そのため、学校外に自分のルーツを確認する場を獲得することが必要となる。学校では、マジョリティの論理に巻き込まれてしまうマイノリティであっても、その他の場で主体的に学ぶことによって自尊感情を維持することが可能となる。ニューカマー教育支援にとって、重要なのは、このような多様な場を確保する機会を提供することである。